

広島大学図書館蔵『家伝書』

—北村季吟を取り巻く書物のひとつとして（付・『家伝書』翻刻前半）—

小川陽子

【キーワード】家伝書、北村季吟、露川、松琵、古典学

はじめに

広島大学図書館に、北村季吟（寛永へ一六二一四）元々宝永一へ一七〇五年）の名を有する『家伝書』という一書が所蔵されている。『古今和歌集』『源氏物語』『伊勢物語』等にかかる伝書で、近しいものは他機関にも所蔵されている。しかし、現存諸本をまとまつた形で把握することは、これまでなされてこなかつたようである。

周知のとおり季吟は、『大和物語抄』以下、多くの古典注釈を出版によつて世に送り出しており、近世そして近代に至るまで、その古典学の影響は絶大である。その季吟に由来すると明記された伝書がいかなるものであるのか、本稿ではその基礎的整理を行うこととしたい。

一 広島大学図書館蔵『家伝書』

広島大学図書館蔵『家伝書』（以下、「広大本」と呼ぶ。所蔵番号・大国202）の書誌情報は以下のとおりである。なお、全冊のカラー画像が国文学研究資料館「国書データベース」にて公開されている。⁽¹⁾あわせ参照されたい。

写本一冊、帙入り

帙題 「北村季吟傳 膀庵露川自筆

古今源氏伊勢 家傳書

徒然草血脉秘訣 享保19¹⁹

外題 なし

内題 「家傳書」

寸法 二六・四×一九・五cm

編纂を行なつて勢力拡大に努め、美濃の支考と対立、論争になつた。茶道を太郎庵、画を黄朴孤に学んだ。

先に記したように広大本には「月空」「露川」の印があり、露川の

自筆奥書本と判断される。奥書にいうところの享保十九（一七三

四）年は露川七十四歳、晩年の伝書である。

続いて、露川からこれを受けた松琵については、『国書人名辞典』

（一九九五年、岩波書店）に次のようにある。

松 琵（よし） 俳人「生没」寛文十二年（一六七二）生、寛延三

年（一七五〇）八月十五日没。七十九歳。墓、大津竜ヶ岡俳人

墓地。〔名号〕初め西川氏、のち窪田氏。通称、庄五郎・清十

郎。号、心正堂・負月翁・宗心・松琵。〔経歴〕近江大津の

人。初め芭蕉に学び、没後は正秀の門人となる。芭蕉と正秀の追悼集を編んだ。晩年は大阪に移住。

「心正堂」と号した由、広大本には二箇所にわたつて「心正堂」印

が見られることから、奥書にいとおり松琵に口授書写させ、露川

が自筆奥書を加えた後、松琵が所持したものと見てよいだろう。

その内容に目を向けると、露川の奥書に「和諧口傳覺書」（十六葉古今集三箇源氏物語三箇伊勢物語七箇徒然草三箇血脉等之秘訣一巻）

とあるとおり、いわゆる古典の秘訣の類が一冊のうちに記し留められている。奥書冒頭にいうところの「和歌口伝覺書」というタイトルは記されないものの、「天の浮橋の上にて男神女神と成給へることを則和哥と云」との一文から始まり、前半は「歌の品分事」「歌

の趣の事」ほか和歌にかかわる説々をおさめる。以下、収載されたものを記載名のとおりに挙げれば、次のとおりである。

古今集三鳥

源氏物語三箇之傳

伊勢物語七箇之傳

つれく草三箇之傳

六躰之事

歌道師資相承古今傳授血脉

二條冷泉正統系圖

三鳥（三木三草）

随所に朱墨で「口傳」と記されており、露川としてはたしかにこれらを秘すべきものとして捉え、松琵へと伝えたものと思しい。野

田別天鷹氏⁽³⁾に拠れば、

支考に「門人好」と呼ばれた露川は、折本の名目伝とて、切字の作法など記した物を伝授し、和歌俳諧の秘事新式などいふもの授けて、入門誓戒の書を門人から徵してゐる。その書状数百通現に澤家に伝へられてゐる。

とのこと、露川は門人たちへさまざま伝授し、誓戒書を出させたことが確認できる。「数百通」にのぼるという誓戒書のうちのひとつが松琵に拠るもので、野田氏によつて翻刻が供されている。⁽⁴⁾

▽誓戒之事

一和歌誹諧口傳秘書等之儀一句一言も妄に他言申間鋪候若於

相背者可蒙和歌三神之御罰者也

正徳五年五月十二日

窪田清十郎

松琵（華押）

月空露川師

「和歌誹諧口傳秘書等之儀」とあり誹諧を含むこと、正徳五（一七

一五）年のものであることから、広大本とは別の機会に提出されたものと判断される。松琵は右の誓戒書を出した後も露川に学び、享保十九（一七三四）年にさらなる伝授を受けたことが、広大本によつて認められるといえよう。

なお、前述のとおり広大本には随所に朱の書き入れが見受けられるが、それらは、本文に対する補足や修正が施されたものである。松琵あるいはその後の所持者の所為か。

二 『家伝書』の現存諸本

さて、上述のとおり広大本は帙題・内題ともに「家伝書」と記されているが、国書データベースでは「和歌秘伝書」（著作ID：542449）の項に収載されている。⁽⁵⁾ 同項によれば、『国書総目録』収載の伝本は以下の四本である。

【写】宮書（九六古新註の付）、岩瀬（慶長九写一冊）、神宮（一冊）【版】（正徳六版）九大（二卷二冊）
しかし、岩瀬文庫本は、西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース⁽⁶⁾

によれば、

19丁目裏、本文末尾に元奥書「天永五年正月廿日 宗藤」（天永は天永の誤写）。卷末に元書写識語「慶長九十月廿一於江戸急写之重而可清書者也」。書中、懷紙の裏書や短冊の裏書の書式例に永正の年号あり、その頃の改訂成立か。

と記されており、成立時期からして無関係のものと判断される。また、九州大学本は、九州大学附属図書館貴重資料デジタルアーカイブ⁽⁷⁾にて画像を確認したところ、広大本とは別内容の書物であった。

続いて、国書データベース同項に収載された諸本として以下の十本がある。

- 1 家傳書、国文研岩津、90-18、写、文久1、1冊
- 2 家傳書、広島大図、DIG-HRSM-00650、写、享保19、1冊
- 3 和歌三神傳、中田光子、+03-007-006、写、1冊
- 4 和歌秘傳、奈良女大学情セ、DIG-NARA-01098、写、1冊
- 5 和歌秘伝書、巻町郷資館源、写、正安4、1冊
- 6 和歌秘伝書、神宮文庫、写、1冊
- 7 和歌秘伝書、書陵部、020-0280-003-0002、写、1冊
- 8 和歌秘傳書、矢口丹波記念文庫、ヤ08-0029-002、写、1冊
- 9 「和歌秘伝書」、金城学院図、DIG-KJGT-00173、写、1帖
- 10 わかひてむ書、国文研、タ-2-28、写、天文22、1冊

このうち6は前掲『国書総目録』の「神宮」、7は同「宮書」と同一書と思しい。右のうち、国書データベースに画像の収載されてい

る諸本を確認したところ、広大本と同内容を持つのは1国文学研究資料館岩津資雄旧藏本のみで、4および7～10はいずれも別の書物であった。5は画像未収載であるが、正安四年という年次からすると別の書と思しい。画像未見の3、6については、他日を期したい。

さらに、広大本の「家伝書」として書名を手掛かりとして国書データベースを閲すると、同名の書として著作ID136481、同1080484、同4364272、および、「露川伝書」と題する著作ID4430945、以上の四項目が見出だされた。これらについて、以下、順に確認していく。

○家伝書 著作ID136481

三原市立図書館蔵本のみ掲載。同館へ確認したところ、所蔵古典籍は基本的に三原市文化課へ移管されており、現在は三原市歴史民俗資料館にて整理中とのことで、閲覧が叶わなかつた。国書データベースにも画像未収載のため、詳細不明。

○家伝書 著作ID1080484

国文学研究資料館初雁文庫蔵本一本（11-386、12-149）掲載。うち一本（12-149）は、収載画像によれば、広大本と同内容。もう一本（11-386）も、画像未収載であるが、「露川講」「松毬記」とあるため、同内容か。

○露川伝書 著作ID4430945
蓬左文庫蔵本のみ掲載。雑賀重良旧藏の江戸写本。国書データベースに画像未収載のため詳細不明。

○露川伝書 著作ID4364272
岡崎市美術館大磯義雄文庫蔵本のみ掲載（画像未収載）。国書データベースによれば、写本三冊、「宮古山口邑 中沢与惣右衛門 昌明藏書」と記されている由。書誌注記における、

〔般〕諺諺相伝（露川伝書俳諺新式和解一巻）・家伝書（和歌口

伝覚書 古今 源氏・伊勢・徒然草・血脉等）・連歌俳諺（諺

諺本式作法等）、「高嶋今津書林鳥來堂」の黒印がある。

〔奥〕（識語）「延享四壬子卯歳仲冬十日 負月居士松毬」。

〔写〕松毬が福田氏五珪に口授書写させた露川伝書の善本。

〔備〕資料番号 四〇。

との記載内容に鑑みて、広大本と同内容をその一部に含むものと思しい。

以上のことから、現段階で広大本と同内容の書物と判断されるのは、国文学研究資料館岩津資雄旧藏本（以下、岩津本）、国文学研究資料館初雁文庫蔵本二種（以下、初雁本）、岡崎市美術館蔵本（以下、岡崎本）の四本となる。

右三本のうち岩津本は、川上一氏「国文学研究資料館所蔵岩津資雄旧蔵書分類目録 解題」⁽⁸⁾において取り上げられた資料のひとつである。奥書に、

和譜口傳覺書二十五葉古今集三箇源氏物

語三箇伊勢物語七箇徒然艸三箇血脉等
之秘訣不残一卷季吟老人相承之旨今與

福田氏五珪子明口授畢令寫之

延享四舍丁卯年十一月十一日

負月居士松琵

文久元辛酉年七月日

松蔭精舎 吐月寫〔印〕

とあり、広大本とほぼ同一の記述内容ながら、四角囲みのよう授受者が露川・松琵から松琵・五珪へと変わつており、「歌道師資相承古今傳授血脉」も、広大本と同様に季吟、露川、松琵の名を連ねたのに統いて、以下のように記されている。

松琵 氏窪田
負月居士 五珪 氏福田
山泰子 氏筒井
怪身菴 氏井

福田五珪なる人物は未詳であるが、露川から伝授を受けた松琵が、さらに次代へとそれを伝えたことがうかがえる。

岡崎本も、前掲の書誌注記における「松琵が福田氏五珪に口授書写させた露川伝書の善本」との記述に鑑みて、岩津本と同じく松琵から福田五珪への伝と考えられる。岡崎本は「延享四舍丁卯歲仲冬

十日」の由、岩津本奥書の前日であるため、あるいは三冊本のうち「誹諧相伝」ないし「連歌俳諧」が十一月十日のもので、「家伝書」は岩津本と同じく十一日のものであろうか。概本による確認が必要なところである。

これに対し初雁本（12-19）は、「歌道師資相承古今傳授血脉」ならびに奥書ともに広大本と同一であるが、広大本が「月空」「露川」の印を有するのに対し、初雁本は「左判」と記され、さらに、「于時寛延四辛未天林鐘下旬」

朝聞亭菊籬写之者也 〔印〕

との書写奥書を有するため、寛延四（一七五一）年に広大本を転写したものと判断される。松琵没後のことであり、事情は不明であるが、露川伝書の拡散がうかがえる。

国書データベースによつて確認しうる伝本は以上であるが、上述のとおり野田氏⁽⁹⁾は、露川が門人へ和歌に関する伝授を行つたこと、門人たちの提出した数百通もの誓戒書が現存することを指摘されており、同種の本は少なくなかつたと推察される。そのうちどれほどが現存するかは不明であるが、広大本は、露川自筆の奥書を有する一本であり、その伝授の具体相を知りうるものとして貴重といえよう。

三 露川伝書と北村季吟

露川は奥書ならびに「歌道師資相承古今傳授血脉」において季吟

からの相承を明記している。現代の辞書類⁽¹⁰⁾においても、「初め季吟、次いで名古屋の蘭秀に学び」（国書人名辞典）、「初め季吟や横船に学んだ」（日本国語大辞典）、「はじめ貞門の北村季吟、吉田横船に、ついで松尾芭蕉にまなぶ」（日本人名大辞典）のように季吟に学んだと明記するものは複数存する。一方で、「はじめ季吟・横船に学んだとも、如泉門ともいう」（日本古典文学大辞典）、「はじめ季吟・横船（蘭秀）門か」（俳文学大辞典）、「はじめ季吟・横船門か」（日本古典文学大事典）のように慎重な記述に留まるものも少なくない。この点について、服部直子氏⁽¹¹⁾は、

・露川は早く季吟門ではないかという推測がなされている。これは決定的な証拠を持たないが、「和歌口伝覚書」（家伝書）といつた類の伝書を実際に弟子に与えており、その巻末「和歌師資相承古今伝授血脉」に、

・人丸・俊成・定家・貞徳・季吟・露川

と記しているところから見て、少なくとも露川が「古今伝授（伝書）」を受け、季吟流の歌の道を学んでいたことに大きな自信をもつていたことが窺われる。

・元禄十二年頃の露川・季吟の交流の可能性はほとんどあり得ず、こうした注釈書（小川注・元禄十二年の奥書をもつ写本『古今和歌集教端抄』）も露川あたりが披見できたとは考えられないが、少なくとも季吟の考え方、古今伝授の一貫した考え方を露川が自らの世界へ取り込んだと言つてもよいであろう。そ

れは一種の権威付けでもあり、そうした歌の伝統をもつたものの「俳諧」こそが正統である、という意識が露川にはあったのではなかろうか。

と述べておられる。

稿者は近世俳諧についてまったくの専門外であり、両者の関係について確定していくための材料を持ち合わせないが、季吟の関与した伝授の中には、露川伝書と比較検討可能なものが複数見受けられる。

まず、北村家の「遺物目録」には、以下の記載が見られる（関係

するもののみを抜粋）⁽¹²⁾

一、徒然草三ヶの大事 三枚 季吟自筆

一、古今相伝基俊より伝來の図 三枚 同

一、一首の大事（相伝物） 一枚 同

一、三鳥の大事（相伝物） 一枚 同

一、源語秘訣 一冊 同

一、口伝之一通 一冊 同

一、古今集伝受制法 一冊 同

一、源氏物語二ヶの秘訣 一枚 同

なお、右のうち『源語秘訣』について言及された宮川真弥氏は、「その所在を確認できていない」⁽¹³⁾とのことである。

現存が確認されている資料としては、季吟から柳沢吉保へ伝えた「古今集并歌書品々御伝受御書付」、季吟の孫である季任（一六八四

（一七〇九）が切紙をまとめた『北村季任聞書』が挙げられる。それぞれ宮川葉子氏、宮川真弥氏の御研究⁽¹⁴⁾に詳しく、前者については、

吉保は元禄十三年（一七〇〇）八月二十七日、幕府歌学方であつた法印北村季吟より古今伝を受け、その一箇月後の九月二十七日、伝受書付（所謂伝受切紙の類）を受けとつた。もつともその折の伝受書付は、元禄十五年（一七〇二）四月六日、柳澤邸の火災により灰燼に帰し、現在柳沢文庫に残る一式は再発行のものである。⁽¹⁵⁾

と述べられているもので、露川伝書と対象の重なるものとして『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』『徒然草』の伝受切紙、ならびに「師傳之血脉二通」を含む。また後者については、前者の一部と内容が一致する由である。⁽¹⁶⁾ これらとの内容的重なりの有無を精査していくことで、季吟と露川の関係に迫つていける可能性はある。後考を俟ちたい。

おわりに

季吟との関係性が事実であつたかどうかはともかくとして、服部氏も述べられたとおり、露川がそれを明記しながら多数の門人に伝授を行つたことは見逃しがたい。露川自身の認識や振る舞いだけでなく、露川から伝を受けた側が、季吟に由来するとされる伝書をいかに受け止めたか、という点でも重要なと考えられるのである。

広大本が露川から伝えられた享保十九（一七三四）年は、季吟の没後およそ三十年が経過している。露川伝書に含まれる『古今和歌集』『源氏物語』『伊勢物語』『徒然草』は、いずれも季吟の手によつて注釈が出版されており、このような伝書を欲する人々は、それらの版本も手にしていただろう。俳諧と和歌とを学び、古典注釈に通曉し、ついには幕府の歌学方として召し抱えられた季吟は、別格の存在であった。松琵ら露川の門人たちは、その季吟の伝える（とされる）ところを、不特定多数にひらかれた版本ではなく、伝書という形で、師を通して我が物としたわけである。「血脉」の末尾に自らの名までも記された一書が、たいへんに魅力的なものであつたことは想像に難くない。近世における古典をめぐる意識および実態の一具体相をうかがわせるものとして、露川伝書、中でも露川の自筆奥書を有する広大本の意義は小さくあるまい。よつて、ここに翻刻を提供する次第である。

〔注〕

(1) <https://doi.org/10.20730/300048481> (二〇一五年九月二六日最終閲覧)

(2) 服部直子氏『尾張俳壇攷 近世前期俳諧史の一側面』(二〇〇六年、清文堂)

(3) 野田別天樓氏『花虛木開題』(安井小洒校訂・編『蕉門珍書百種』第五卷 一九二九年刊、一九七一年複刻、思文閣)、一〇一頁

- (4) 野田別天樓氏前掲注(3)論、11011頁
- (5) <https://kokusho.nij.ac.jp/work/542449?ln=ja> (11011五年九月二一六日最終閲覧)
- (6) <https://adeac.jp/iwasebunko/catalog/mp01429400> (11011五年九月一六日最終閲覧)
- (7) <https://hdl.handle.net/2324/4354913> (11011五年九月一六日最終閲覧)
- (8) 海野圭介・岡崎真紀子・川上一・神作研一・中西智子氏編「国文学研究資料館所蔵岩津資雄旧蔵書分類目録」(『調査研究報告』第44号 11011四年四月)
- (9) 野田別天樓氏前掲注(3)論、11011頁
- (10) それぞれの引用は以下に挿る。『国書人名辞典』(一九九八年、岩波書店)、『日本国語大辞典』(11011二年、小学館)、『日本人名大辞典』(11011一年、講談社)、『日本古典文学大辞典』(一九八五年、岩波書店)。「露川」項は石川八朗氏執筆)、「俳文学大辞典」(一九九五年、角川書店)。「露川」項は服部直子氏執筆)、「日本古典文学大事典」(一九九八年、明治書院)。「露川」項は服部直子氏執筆)。
- (11) 服部直子氏「俳諧師の紀行—『国曲集』(正徳四刊)をめぐつて—」(前掲注(2)書所収)、1117頁
- (12) 『北村季吟』(一九五五年、祇王小学校)、1111頁
- (13) 宮川真弥氏「季吟奥書『源語秘訣』と如庵箕形宗乾」(『北村季吟

の書と学問』11011五年、新典社)、11411頁

(14) 宮川葉子氏「古今伝授」(『柳澤家の古典学(下)』—文芸の諸相と環境—) 11011一年、青簡舎)、宮川真弥氏「源氏物語打聞」と北村家の学問」(前掲注(13)書)

(15) 宮川葉子氏前掲注(14)論、1121頁

(16) 宮川真弥氏前掲注(14)論、11396頁

〔付 記〕

閲覧ならびに翻刻を許可された広島大学図書館に記して御礼申し上げます。本研究はJSPS科研費JP25K03845の助成を受けたものです。

《翻刻》広島大学図書館蔵『家伝書』(前半)

〔凡例〕

広島大学図書館蔵『家伝書』(請求記号 大国202)の前半を翻刻する。紙幅の関係上、後半については他日を期したい。翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷上の都合と通読の便宜とを考えて、次のような方針に従つた。

一、底本の変体仮名は、すべて現行の字体に統一した。漢字については、できるだけ底本の字体の再現に努めた。

一、見せ消ち訂正がある場合は、見せ消ち符号を付された文字に抹消線を施した。見せ消ち符号が朱の場合は抹消線を二重線とした。

一、改行は、底本のとおりとした。丁の切れ目を(○オ)、(○ウ)のように示した。

一、朱筆は、ゴシック体で表した。

一、特記すべき事項がある場合は、該当箇所の頭に*を付し、当該

丁の末尾に内容を記した。

〔翻刻〕

(一オ)

家傳書

天の浮橋の上にて男神女神と成給へる」

とを則和哥と云伊弉諾伊弉冉尊橋の上より
瓊戈を下してその靈自凝嶋となる男神は

卉美遇二アツミヨシアビス少女ウマシヨトメニ一女神は卉美遇「少男」アツメイ一是歌の

始なれと哥も文字も分らす○また天にしては

下照姫アツミヨシに始まるアモなるやをとたなはたの

うながせる玉のみすまるあなたまはやみ谷ふた

わたらすあちすき高ひこね○あらかねの地にし

ては日神の兄素戔烏尊アマテラスよりはしまる

(一ウ)

三十一文字八雲たついつも八重かきつまこめにやゑかきつくるその八重垣を。*難波津の

言の葉は仁德天皇より起る難波津に咲や

この華冬ヒナタこもりいまを春へと咲やこのはな○扱ハサフ

衣通姫の哥にたえなること立かへりまたも

○世アシタにあとたれん名も面白き和哥のうらなみ

○それより**橘キク諸兄卿の万葉集に記せり○***浅香ヒタチ

山の言の葉は采女ヒメより始まりあさか山かけ

さへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

○其後貫之の古今集にあらはる

*「難波津」朱で庵点を付した後、庵点に見せ消ちあり

**「橘諸兄」左傍に「カツラキノ大公」と朱書あり

*** 「浅香」左傍に「大キミニ仕」と朱書あり

(二オ)

歌風流

大歌所御哥 大内舞姫等の居所也
あたらしきとしのはしめにかくしこそ

千とせをかねてたのしきをつめ

催馬葉拍子 朝倉かへし

霜^ホ*はたひをけどかれせぬさかき葉は

立さかゆへき神のきねかも

神遊^ビの哥

神垣のみむろのやまのもみち葉は

かみのみまへにしけりあひけり

*「は」朱で「八」を重ね書き

(二ウ)

ひるめの歌 曙日^ヒ天照大神にすむ

いかばかりよきわざしてかあまでるや
ひるめの神をしはしとゝめん

冬鴨祭歌

ちはやふるかものやしろの姫小まつ
よろつ代ふとも色はかはらし

大和曲^{フリ}

陸奥曲

相模曲

(三オ)

めさしぬらするをきにおれ波

常陸曲

つくはねの峯のもみちは落つもり

甲斐曲

しるもしらぬもなへてかなしも

夷曲

かひかねをねこし山こし吹風を

伊勢曲

人にもかもなことつてやらん

近江曲

我せこを都にやりてしほかまの

伊勢曲

まかきかしまのまつそ恋しき

夷曲

君か代はかきりもあらし長濱の

(二ウ)

まさこの数はよみつくすとも

近江曲

あふみより朝たちくればうねの、に

しま漕がへるたなくしを舟

しもといふかつらき山にふる雪は
まなく時なくおもほゆるかな

大くまに霧たちくもり明ぬとも

君をばやらしまてはすへなし

こよろきの磯たちならし磯なつむ

水茎曲

水、ぐきの岡のやかたにいもとあれは
ねてのあさけの雪のふりはも

東曲

最上川のほれはくたるいな舟の

いなにはあらす此月ばかり

美濃曲

美の、くに閑のふし川たへすして

きみにつかえん萬代までに

美作曲

美作や久米のさら山さらくに

我名は立し万代までに

(四才)

歌之品分事

一長調

五七五七七ト心續か故長哥なり

八雲たついつもやえかきつまこめに

八重垣つくるその八重かきを

一短歌

五七五七五也いかほども長くつゝく也
いかほど續ても心切る也

おもひ初 我身はつねに

あふことの まれなる色に

あま空の はるゝ時なく ふしの根の もへつゝとはと

おもへとも あふことかたし 浮世とも見む

打わたすをちかた人に物もうすそれそのそこに

白く咲けるは何の華そもそも

(四ウ)

一混本歌 四句續く長哥に末、一句なき也

朝かほの夕かけまたすちかやすき

華の浮世そ五かし

一誹諧歌 体狂言にして心直に續也

山ふきの花色ころもぬしやたれ

とへとこたへす口なしこにして

一廻文歌 打返してよむ也是に二品あり又

うち返してよく聞は余の哥に聞るもあり

むら草に草の名はなしそなわらば

なそしなはなの咲にさくらむ

一杏冠調 あはせたきものすこしといふ題を
哥切くの上下に置てよむ也

逢坂もはてはゆきゝのせきもいす
たつねてといこきなはかへさし

(五才)

一折句歌 題五文字を句の上に置なり

から衣きつゝなれにしつましあれは

はるゝきぬる旅をしそおもふ

一鶲鶴返 常の三十二字の内にて一文字を

なをして返哥とす

雲の上はありし昔にかはらねと

見し玉たれの内そ ゆかしき

歌の趣の事

一歌三十一字にすることは如來三十二相をかたとる也
無見相は一形あらはれす仍而三十一相とする也

一哥五切を地水火風空の五行とす仍而地は足
の病水は腹の病かやうに取て四病八病と名付哥是故なり

（五ウ）
一歌佛神の道に入事六体則六道に通するなり
三十二相六道等の事俊成卿住吉に參籠の時夢想也

一懷帝に哥一首書く事十一字九字六字四字一字と
五行に書へし又三首五首書時は二行に七字に書へし

ゑん書は四三一三三三三二

一會掛物の事○住吉○左に人丸○右に赤人也

又君座の時人丸の繪を掛こと秘蜜也壁か障子に
掛へし君ののむかひ左すしかいに壁に掛へし

一初心の哥のよみやう浅きより深きに入へし

一功者哥の讀やう深きよりあさきに入へし

一哥声によむことも有或は國の名所の名又声にて

（六オ）

いひぶらしたる草等何にても是に准へし

一内裏にて撰集等の哥吟する時先八雲立の

哥三返吟し其後段々返よむ也我哥の詞書は
哥よみ侍りしと也又外様の哥は吟しても

詞書も讀侍りけりと書也

歌等類をくる證歌の事

みやこをは霞とともに出しかど

秋かせそふくしら川の閑

能因

都にはまた若葉にて見しかとも

もみち散しく白川のせき

頼政

此二首歌のさま等しきに似たれと能因の

（六ウ）

哥は情をもつはらにして姿にかゝはらす

頼政の歌は姿を專にして情にかゝはらす
仍能因は其身旅姿に成て此哥を披露

すまた頼政はその身束帶して此哥を

披露すとや爰を以て等類とせず此外の

歌も是に准して等類をくるへし

隔句の哥の事

秋風吹の峯の松原吹しほり

雲の行かふ

句の上下を混雜して句作哥を云たとへは

秋風の吹といふへきを峯と讀松原雲の

行かふと云を松原吹^ヘなと連讀する心

親句の事

初の五文字に七五七七の句を一句つ、合せてみな

あふをいふなりほのくの哥等也

疎句の事

初の五もしに七五七七の句おのつから一句^ヘ二句つ、あへらん
を云親句に秀たる少し疎句に秀たるはしけし

(七才)

哥の善惡を知る事

歌のよしあしさはいかに定むへきやと定家卿
父に尋られしに汝常の義理をしるやいなや
曰法令の道は学すしては知かたし世上の
黑白の理は知也としからは其理にて哥の

取捨すへし田夫も聞て能き哥は能也

歌の始一首の姿の吏

哥の讀やう心^ヘおほめかは言葉もおほめくへし

題と對といふ事

一首の次第句毎に言葉の縁ある事を合て
いたす也是を縁の言葉といふ也

(七ウ)

歌の首尾

首尾とははじめの五もしと終の七文字と其
濫觴のあふたるを云也

縁の字の事

初の五文字に次の四句の内いつれにてもよく
あふことを云也

(八才)

遍序題曲流

遍^ヘ片端^ヘ序^ヘ由來^ヘ題^ヘ顕^ヘ

あなるしいともくるしき青柳の

わかゆくかたはよりによられて

口傳

曲^ヘ轉^ヘ流^ヘ行^ヘ

A Bibliographical Introduction to Kadensyo

Yoko OGAWA

The *Kaden-sho*, a part of the Hiroshima University Library collection, is a work that encompasses the teachings that Rosen (1661-1743) passed onto Shohi (1672-1750) based on what he had learned from Kigin Kitamura (1624-1705).

Kigin published many classical commentaries, beginning with his *Yamato Monogatari-sho* which have had a pronounced impact on classical literature from the early modern period, through to the modern period. This paper provides a foundational examination and transcription of works attributed to Kigin.